

伊勢国分寺跡 6

2006年3月

鈴鹿市考古博物館

例 言

例 言

1. 本書は、国庫・県費補助事業として鈴鹿市が2005(平成17)年度に実施した史 伊勢国分寺跡 史跡等・登録記念物保存修理 事業にかかる伊勢国分寺跡(第31次)発掘調査の概要をまとめたものである。

2. 発掘調査は下記の体制で実施した。

調査主体 鈴 鹿 市 (市長 川岸 光男)

調査指導 八賀 晋 (三重大学名誉教授)

大場範久 (鈴鹿市文化財調査会会長)

川越俊一 (奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部長)

金田章裕 (京都大学大学院文学研究科教授)

高瀬要一 (奈良文化財研究所文化遺産研究部遺跡研究室長)

渡辺 寛 (皇學館大学文学部国史学科教授)

和田勝彦 (東京純心女子大学事務局長)

文化庁文化財部記念物課

三重県教育委員会文化財保護室

調査担当 鈴鹿市考古博物館

(組織及び構成) 鈴鹿市考古博物館長

中森成行

主幹兼埋蔵文化財グループリーダー

藤原秀樹

埋蔵文化財グループ主幹

宮崎正光

副主査

田中忠明・小倉 整

事務吏員

伊藤 淳

嘱託

吉田真由美・林和範・服部英世・小西絵美

臨時職員(整理)

杉本恭子・長田弘美・永戸久美子・別府智子

3. 調査を実施した個所及び面積は以下のとおりである。

三重県鈴鹿市国分町字堂跡 292 外 合計 1,022 m²

4. 調査期間は平成17年7月28日～12月9日である。

5. 現地作業と本書の執筆・編集は伊藤が担当した。

6. 現地調査参加者は以下のとおりである。

井分重信・武田俊彦・中川征次・中川守・中島明保・永戸尚子・永戸久子・永戸三代・永戸宗武・吉岡健次

7. 遺跡位置図には国土地理院発行の1/25,000地形図鈴鹿・亀山の一部を使用した。

8. 座標は過去の調査成果と整合性を保つため国土座標第Ⅵ系を用いた。図中の方位は座標北を示す。

9. 遺構番号は遺構の種別を示すS A (塀)・S B (建物)・S D (溝)・S K (土坑)・S I (竪穴住居)の記号の後に発掘年次を示す「05」と3桁の通し番号を付けSD05001のように示した。

10. 調査区は、各調査区の通称のほかに、12 mの方眼をベースとして北西角の国土座標のY・Xそれぞれの下三桁を組み合わせた276・843といった表示を併用している。

11. 本調査にかかる遺物・写真・図面はすべて鈴鹿市考古博物館が保管している。

12. 調査及び報告書刊行に際して上記指導委員の先生の他、地元各位はじめ下記の方々のご指導を得た。

(敬称略・順不同)

鈴木克彦・竹内英昭・新田剛・禰宜田佳男・野原宏司・山下信一郎・山田猛・吉水康夫

目次

本文目次

I. はじめに	
(1) 調査に至る経緯と経過	1
II. 調査の成果	
(1) 基本層序	5
(2) 検出遺構	5・6・7
(3) 出土遺物	7
III. まとめ	8
報告書抄録	18

図版目次

Fig. 1 伊勢国分寺跡の位置と周辺の遺跡	1
Fig. 2 調査区位置図	3・4
Fig. 3 調査区遺構配置図	9
Fig. 4 サブトレンチ断面図	10
Fig. 5 サブトレンチ断面図	11
Fig. 6 推定院復元図	11
Fig. 7 出土遺物実測図	12

表目次

Tab. 1 伊勢国分寺跡発掘調査履歴	2
---------------------	---

写真目次

Plate 1 調査区全景／調査区遠景	13
Plate 2 SA05027, SA05028 検出状況／SA05027 検出状況／SA05026 検出状況／SD05001 検出状況／SD05001 サブトレンチ／SD05002-1 検出状況／SD05002-1 サブトレンチ／SD05002-2 検出状況	14
Plate 3 SD05003-1 検出状況／SD05003-1 サブトレンチ／SD05003-2 検出状況／SI05011 検出状況／SK05014 検出状況／SI05018 検出状況／SD05019 検出状況／SD05019 サブトレンチ	15
Plate 4 SK05021 検出状況／SB05022 検出状況／SD05030, SD05031 検出状況／SD05031 サブトレンチ／SD05040 検出状況／作業風景／鬼瓦(1)／軒丸瓦(2)	16
Plate 5 軒丸瓦(3)／軒平瓦(4)／軒平瓦(5)／セン(6)／刻印瓦(8)／刻印瓦(9)／須恵器杯蓋(11)／土師器杯身(14)	17

I. はじめに

調査に至る経緯と経過

伊勢国分寺跡は鈴鹿川左岸の台地上、鈴鹿市国分町字堂跡・西高木・西谷に所在する。大正11(1922)年10月12日に国史跡に指定された。

昭和63年(1988)度から平成2(1990)年度にかけて、鈴鹿市教育委員会によって史跡の範囲確認調査が実施された。その結果、伽藍地は築地堀に囲まれ、ほぼ180m四方の規模であることが確認された。鈴鹿市ではその成果をもとに、平成7(1995)年度から3カ年で史跡の公有地化を完了した。また、ガイダンス施設を兼ねた鈴鹿市考古博物館を隣接地に建設し、平成10(1998)年10月に開館した。

平成11(1999)年度から新たに、史跡整備計画策定に必要な中心伽藍の位置・規模の確定を目的とした史跡指定地内の調査に着手した。平成11・12年度は市の単費事業として、平成13(2001)年度からは国庫・県費補助を受け「史跡伊勢国分寺記念物保存修理事業」として実施している。平成11年度から昨年度までの調査で、講堂・金堂・回廊・中門・南門・僧坊の主要伽藍の位置

及び規模が確認されている。しかし、これまでの調査では塔の所在を示す遺構は確認されていない。

このため、本年度の第31次調査においては、未確認である塔の確認を主眼として調査を行った。また、必要に応じて調査区を拡張した。

調査は、7月28日から調査区の表土除去に着手した。作業員は10月18日から投入した。11月8日には国史跡伊勢国府跡・伊勢国分寺跡調査指導委員会を開催し、今回の調査成果について指導を受けた。遺構検出がすべて完了した11月18日には調査区の航空写真撮影を行った。11月22日には文化庁の禰宜田文化財調査官、12月2日には同じく山下文化財調査官の現地視察と指導を受けた。その後、記録等の補足的な作業を12月9日まで続けた。2006年1月15日には現地説明会を開催して、約68名の市民の参加を得た。山砂による遺構面の保護と埋め戻しを行いすべてが完了したのは1月20日であった。

なお、過去の調査の詳細及び周辺の歴史環境については、既刊の報告書に詳述されているので、そちらを参照されたい。

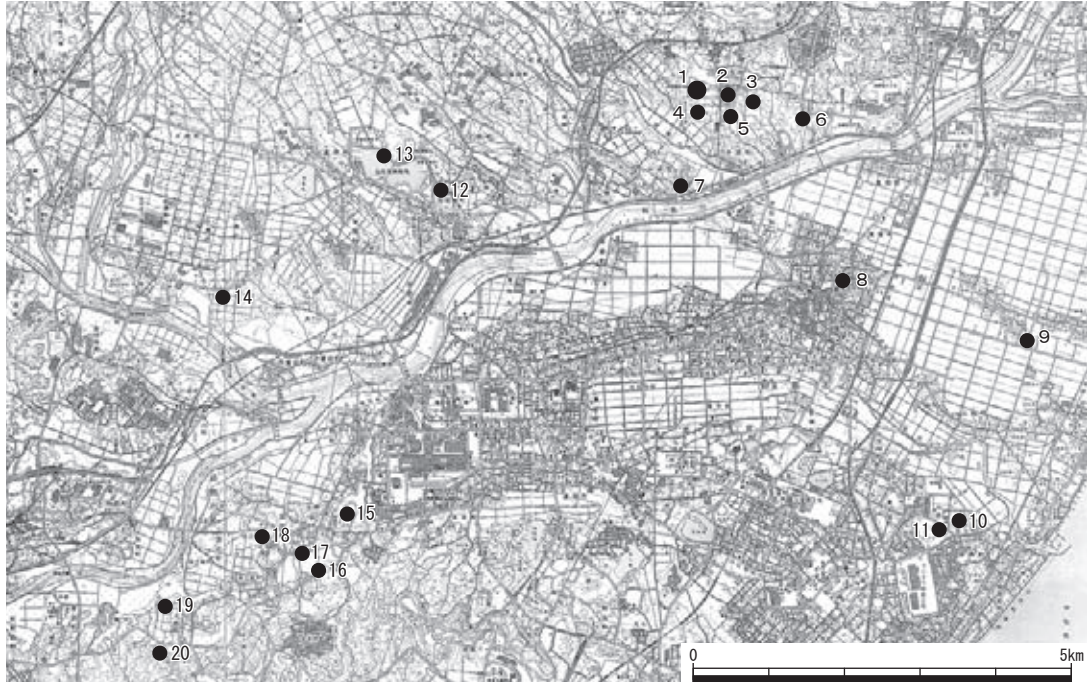


Fig. 1 伊勢国分寺跡の位置と周辺の遺跡 (1 : 100,000)

1. 伊勢国分寺跡
2. 国分遺跡 (国分尼寺推定地)
3. 国分東遺跡
4. 狐塚遺跡 (河曲郡衙跡)
5. 南浦遺跡 (大鹿廃寺)
6. 寺山遺跡
7. 山辺瓦窯跡
8. 須賀遺跡
9. 上箕田遺跡
10. 天王遺跡
11. 天王屋敷遺跡 (廃寺)
12. 川原井瓦窯跡
13. 北野古墳
14. 長者屋敷遺跡 (伊勢国府跡)
15. 梅田遺跡
16. 天王山西遺跡
17. 三宅神社遺跡
18. 国府A遺跡
19. 八野遺跡
20. 八野瓦窯跡

次数	調査年度	遺跡名	調査期間	面積 (㎡)	調査原因	概要
1次	1988	伊勢国分寺跡	880920～881215	450	学術	国分寺築地・掘立・竪穴住居
2次	1989	伊勢国分寺跡	891002～891219	470	学術	国分寺築地
3次	1990	伊勢国分寺跡	901011～901223	352	学術	竪穴・掘立柱建物・国分寺南門・築地
		南浦遺跡		150		掘立柱建物
4次	1991	伊勢国分寺跡	911002～911225	80	学術	土坑
		南浦遺跡		545		瓦溜・掘立柱建物
5次	1992	南浦遺跡	920907～921105	200	学術	大鹿山6号墳・瓦溜
		国分南遺跡		80	溝	
6次	1993	国分西遺跡	930913～931124	338	学術	瓦溜・鬼瓦
		国分遺跡		19	ピット	
		伊勢国分寺跡		142	溝	
7次	1994	伊勢国分寺跡	940523～940731	3,500	博物館	大型掘立柱建物
			941201～950131			掘立柱建物・古墳周溝
8次	1994	国分遺跡	940801～941030	300	学術	尼寺北限溝・鬼瓦・瓦塔
		国分西遺跡		8		なし
9次	1994	伊勢国分寺跡	950105～950228	1,200	博物館	掘立柱建物(倉庫)・掘立柱塀
10次	1995	狐塚遺跡	950803～951016	880	学術	掘立柱建物(郡衛正倉)・竪穴住居・古墳周溝
11次	1995	伊勢国分寺跡	950510～950728	1,200	博物館	溝・土坑・掘立柱建物
12次	1995	狐塚遺跡・ 伊勢国分寺跡	950626～960111	2,170	博物館 (進入路)	掘立柱建物 掘立柱建物・竪穴
13次	1996	伊勢国分寺跡 狐塚遺跡	960415～970306	3,100	博物館 (進入路・駐車場)	掘立柱建物 大型掘立柱建物
14次	1996	伊勢国分寺跡	960605～961002	850	博物館	溝・土坑
14-2次	1996	国分遺跡	970221～970221	12	寺院	土坑・灰釉陶器
15次	1996・1997	伊勢国分寺跡	970307～970425	650	博物館	溝・掘立柱柵
16次	1997	国分南遺跡	970424～970531	1,140	ビニールハウス	掘立柱建物・鋳造遺構
17次	1997	南浦遺跡	970617～970816	830	ビニールハウス	掘立柱建物・鬼瓦
18次	1997	伊勢国分寺跡	970918～971204	680	博物館(外周道路)	掘立柱建物(川曲郡衛正倉)
19次	1997	伊勢国分寺跡	970929～980214	3,000	農地造成	掘立柱建物・中世墓・古墳
20次	1997	狐塚遺跡	980304～980316	90	土地造成	掘立柱建物
21次	1998	狐塚遺跡	980805～980809	1,129	農地造成	竪穴・掘立
22次	1999	伊勢国分寺跡	990715～990930	153	学術(市単)	国分寺講堂
23次	1999	伊勢国分寺跡	000204～000331	132	学術(市単)	国分寺講堂
24次	2000	伊勢国分寺跡	000508～000919	216	学術(市単)	国分寺講堂・金堂
25次	2001	伊勢国分寺跡	010514～011031	1,100	学術(国補)	国分寺中門・回廊・
			020207～020312			国分寺南門・竪穴・掘立柱建物
26次	2001	国分西遺跡	010703～010704	16	個人住宅	土坑・溝
27次	2001	国分西遺跡	020115～020131	98	個人住宅	土坑・掘立柱建物・溝・鋳造関係遺物
28次	2002	伊勢国分寺跡	020509～030228	1,891	学術(国補)	国分寺南門・築地・大型掘立柱建物・竪穴住居
29次	2003	伊勢国分寺跡	030804～040312	2,374	学術(国補)	国分寺僧坊・北門・大型掘立柱建物・築地
30次	2004	伊勢国分寺跡	040723～050128	1,100	学術(国補)	国分寺僧坊・築地
31次	2005	伊勢国分寺跡	050728～051209	1,022	学術(国補)	院・築地
合計				31,897 ㎡		

Tab . 1 伊勢国分寺跡発掘調査履歴

II. 調査の成果

これまでの調査において、伊勢国分寺跡の講堂、金堂等の主要な伽藍は、約 180 m 四方とされる伽藍地の西側 3 分の 2 に偏ることが確認されている。また、主要伽藍周辺については、これまでトレンチによる調査を行ったが、塔の存在を示す遺構は確認できなかった。このことから、東側 3 分の 1 の広い空閑地に塔が建てられていた可能性が高いと推定されてきた。しかし、第 28・29 次調査では、伽藍地内の南東隅で大型の掘立柱建物が南北 2 棟確認された。第 30 次調査では、この南北に 2 棟並ぶ大型の掘立柱建物の西側、第 28 次調査でトレンチ調査を行った箇所について、面的に調査を行ったが、塔の存在を示す遺構は確認できなかった。また、東西の築地塀より北側では、第 29 次調査で食堂と考えられる大型の掘立柱建物が確認された。これにより、伽藍内の区画が次第に明らかとなり、伽藍地内で塔を建てることのできたと考えられる空閑地が次第に限定されてきた。

このため本年度の第 31 次調査では、昨年度に引き続き第 28 次調査でトレンチ調査を行った箇所について、面的に調査し塔の確認を行うこととした。調査箇所は、塔の建設が可能であると考えられる空間を考え、東西の築地塀の南側で、南東隅の大型の掘立柱建物と昨年度の第 30 次調査の塔推定地調査区北側に調査区を設定した。

(1) 基本層序

地表は褐色の耕作土が見られる。一部ではこの表土の下に 5～10cm のよくしまった暗褐色の造成土がある。この耕作土及び造成土は、過去に整地を行ったため 15～50cm とばらつきがあるが、西へ行くほど厚くなる。これらを取り除くと明褐色の地山となる。調査はこの地山層の上面で遺構の検出を行った。

(2) 検出遺構 (Fig.3)

溝 SD05001

築地 SA05026 の西側溝で、東側の全体が瓦で覆われた幅約 0.5 m の溝と、西側の築地に伴う溝の 2 条からなる。築地に伴う溝は幅約 1.7 m、深さ約 0.6 m を測り上層で大ぶりの瓦を多く含む。

溝 SD05002-1

築地 SA05027 の北西溝で、東側で途切れる。断面による観察では、南北 2 条の溝が確認でき、北側は瓦を

含む幅約 1.5 m、深さ約 0.2 m を測る。南側は築地本体に伴う溝と考えられ、北側の溝に切られるが幅約 0.6 m、深さ約 0.2 m を測る。

溝 SD05002-2

築地 SA05027 の北東溝で、東側で北へ折れ溝 SD05002-3 へと続く。幅約 1～2.5 m を測る。これも溝 SD05002-1 と同様に南北 2 条の溝からなるとみられるが遺構の残存状況が非常に悪く、明確ではない。第 28 次調査のトレンチ跡では溝の南側しか確認できない。北側は瓦を多く含む。

溝 SD05002-3

築地 SA05028 の西溝で、幅約 1.7 m を測る。上面に土坑 SK05014 が切っている。

溝 SD05003-1

築地 SA05027 の南西溝で、東側で途切れる。断面による観察では、2 条の溝が確認できるが、完全に溝上で切っているため築地塀に伴う本来の溝の幅は不明である。全体は、幅約 1.8 m、深さ約 0.4 m を測る。

溝 SD05003-2

築地 SA05027 の南東溝で、幅約 1～3 m を測る。東側で SD05030 に切られるため明らかではないが、第 29 次調査のトレンチ調査では溝が検出されていないため、溝 SD05002-2 と同様に北へ折れ溝 SD05003-3 へと続くと推定される。

溝 SD05003-3

築地 SA05028 の東溝で、第 29 次調査のトレンチ調査の結果とあわせると幅約 1.5～2.3 m が推定される。

築地 SA05026

第 28 次調査の SA0206、第 29 次調査の SA0316、第 30 次調査の SA04052 と同じ。南北方向の築地で、上面は削平されており基壇等は確認できない。このため、溝 SD05001、SD05002-1 により幅約 2.5 m であることが推定され、N2°W に傾く。溝 SD05003-1 以南で、SD050001 の続きが確認できないことから、この南北築地 SA05026 は北辺築地から約 122 m の規模であったことが明らかとなった。

築地 SA05027

東西方向の築地で、他の築地同様に基壇等は確認することができない。このため、溝 SD05002-1、-2、SD05003-1、-2 により幅約 2.5 m であることが推定さ

れる。東西で、築地 SA05026, SA05028 にそれぞれ続くと考えられ、東西約 45 m, N 88° E に傾く。この溝 4 条の築地から見て外側は不揃いで幅が一定でないが、内側はほぼ一直線に揃うことから、築地があったのではないかと考えられる。

築地 SA05028

南北方向の築地で、他の築地同様に基壇等は確認することができない。このため、溝 SD05002-3, SD05003-3 により幅約 2.5 m であったことが推定される。第 28 次調査では、この築地及び築地に伴う両溝は検出されていないが、周辺は攪乱等が多いことや今回の調査では明らかに築地が北へ折れていることから、少なくとも同調査で確認された東西築地 SA0203 まで続くものと推定される。今回の調査で確認できる規模は、南北約 30 m で N 2° W に傾く。

門 SB05022

溝 SD05002-1 と -2, SD05003-1 と -2 が途切れた部分の築地 SA05027 上で検出された。径 0.9 ~ 1.1 m の隅丸方形の 2 つの掘り方からなる。柱痕は検出できなかったが柱間は約 2.4 m と推定される。2 つの掘り方しか検出されていないため、簡易な棟門のようなものだったのではないかと考えられる。これは、築地 SA05026 から約 24.5 m の位置にあり、築地 SA05027 の中間よりやや東寄りに位置する。南北はほぼ SA05027 の中心に位置する。

柱列 SA05004

築地 SA05027 上で検出された柱列で、8 基のピットからなり全長約 18.6 m を測る。柱穴は約 30cm の小さな円形を呈し、柱間は約 2.4 ~ 3 m と一定でなく、西へ行くほど広がる。築地 SA05027 のやや北寄りに位置する。簡易な柵だったのではないかと考えられる。

柱列 SA05005

築地 SA05027 上で、柱列 SA05004 と門 SB05022 を挟んで東側で検出された柱列である。これも 8 基のピットからなり全長 17.3 m を測る。柱穴は約 30cm, 柱間は約 2.4 ~ 3 m である。築地 SA05027 のやや北寄りに位置する。

竪穴住居 SI05011

東西約 3.7 m × 南北約 3.2 m を測る。一部を土坑 SK05014 が切る。東の張り出した部分は埋土に焼土を含むことから、煙道ではないかと考えられる。

竪穴住居 SI05018

北東から南西約 3.6 m × 北西から南東約 3.5 m を測る。一部を溝 SD05002-2 が切る。北東の張り出した部分は埋土に焼土と土器片を含むことから、煙道ではないかと考えられる。ここからは 6 世紀後半 ~ 7 世紀初頭の須恵器が出土した。

竪穴住居 SI05033

溝 SD05030 に切られるため全体の規模は不明であるが、東西 1.5 m 以上 × 南北 2.2 m 以上を測る。

溝 SD05016

東西方向の溝で、全体に瓦の細片を含む。埋土の状況から、かなり新しい時代の溝ではないかと思われる。

溝 SD05017

第 28 次調査の SD0202 の南端と思われる。

溝 SD05019

第 28 次調査の SD0289 の東端と思われる。最大幅約 2.2 m を測り、深さ約 0.45 m を測る。埋土の状況から一括で埋まったようである。

溝 SD05030

第 29 次調査の SD0317 の続きである。同調査で近世以降の道路痕と報告済みである。

溝 SD05031

第 29 次調査の SD0318, SD03019 の続きである。同調査で方形周溝を形成するのではないかと報告済みである。

溝 SD050035, SD050037, SD050038, SD050039, SD05041

SD05038 は第 28 次調査の SD0296 と同じ。幅約 0.5 m を測る。竪穴住居の壁溝等の痕跡と思われる。

溝 SD05040

拡張した調査区で検出。溝 SD05001 の東側の瓦で覆われた溝の続きだと考えられる。

土坑 SK05012

東西 3.4 m 以上 × 南北 3.2 m 以上を測る。土坑 SK05014 に切られるため全体は不明であるが、規模から竪穴住居の可能性もある。

土坑 SK05014

溝 SD05002-3 上の不整形な土坑で、全面が瓦で覆われる。

土坑 SK05021

東西約 2 m を測り、南北の規模は溝 SD05002-1 に切

られるため不明である。南の張り出した部分で焼土を確認することができる。竪穴住居にするには規模が小さいため、土坑とした。

土坑 SK05025

東西 0.8 m×南北 1.6 m の長方形の土坑である。

(3) 出土遺物 (Fig. 7)

出土遺物は少なく、瓦が土嚢袋に 30 袋程度出土した。ほとんどが SD05001, SD05002-2, SK05014 の上面出土である。その他、土師器、須恵器等が出土している。

鬼瓦

(1) は SD05002-1 の東端上面から出土。向かって左下の破片で、焼成は良い。厚みは 2 cm と薄い。巻き毛は凸線により表現され外側上方になびく。下辺の外縁は確認できないが、型式は伊勢国府 I 式と似る。(註 1)

軒丸瓦

(2) は SD05001 の東溝上面から出土。単弁八葉蓮華紋で II A 0 3 形式の外縁をもたないものと似るが、範傷部分が異なる。(3) は SK05014 の上面から出土。これも単弁八葉蓮華紋である。中房の蓮子が 6 個であるため、II A 0 2 形式である。(註 2)

軒平瓦

(4) は SD05002-2 の北西上面から出土。重廓文軒平瓦で、厚さが約 2.4 cm と非常に薄く新形式ではないかと思われる。(5) は SK05014 の上面から出土。I A 0 2 形式の重廓文軒平瓦である。

セン

いずれも長方形のセンと考えられる。(6) は SD05002-2 北西上面から出土。(7) は SD05040 上面から出土。

刻印平瓦

(8) は SD05001 の東溝上面から出土。凹面に刻印。刻印文字は「勾」で II A 0 3 勾 B 形式である。(9) は SK05014 の上面出土。凹面に刻印。1 辺 1.2 cm の方形で、布目圧痕のまま未調整である。また、文字全体が印面縁辺に接する。刻印文字については漢数字の「十」と読むこともできるが、不明である。新形式であると思われる。(註 3)

須恵器杯蓋

(10) は SI05018 の焼土付近の上面から出土。(11) は SD05002-1 の上面出土。奈良時代後半のものと考えられる。(12) は SD05031 上面出土。平安時代前半のものと考えられる。

山皿

(13) は SK05025 の上面出土。

土師器

(14) は杯身で、黒斑がありやや肉厚で器表には調整がみられる。SD05031 の上面出土。(15) は広口壺で SI05018 の焼土付近の上面から出土。

(註 1) ここで用いた鬼瓦の分類は前田清彦 2000 『東海地方の古代鬼瓦とその系譜』『三河考古』第 13 号に基づく。

(註 2) ここで用いた軒丸瓦と軒平瓦の分類は新田剛 2002 『伊勢国分寺跡 1』鈴鹿市教育委員会に基づく。

(註 3) ここで用いた刻印瓦の分類は新田剛 2004 『文字瓦を考える』

Ⅲ. まとめ

第 28 次調査において伽藍地の東側 3 分の 1 を区画する南北の築地 SA0206 と、さらにそれを南北に区画する東西の築地 SA0203 が確認された。第 29 次調査において、僧坊が確認されたことにより、中心伽藍は主軸をそろえて伽藍地の西側 3 分の 2 に偏っていたことが明らかとなった。これらの調査成果から、伽藍地の東側 3 分の 1 は築地で区画された北東、南東の 2 院を形成するのではないかと考えられるようになった。

今回の第 31 次調査において、新たな東西の築地 SA05027 と南北の築地 SA05028、築地 SA05026 が確認された。第 28 次調査で確認した築地 SA0203 と築地 SA0206 により、東西約 45 m×南北約 30 m の小規模な院を形成することが確認された。また、この院には、

南に簡易な作りではあるが門 SB05022 があつたと考えられる。

ここで補足であるが、築地 SA05028 については、同築地の検出遺構の項でも述べたが、第 28 次調査においては確認されていない。この築地が北へ伸びると推定した根拠は、築地 SA05026 と築地 SA05027 の接点と、第 28 次調査の築地 SA0206 と築地 SA0203 の接点において、接する築地の間に溝が検出されている。これと同様に、推定による築地 SA05028 と第 28 次調査の築地 SA0203 の接点においても同様の溝が検出されていることから、築地 SA05028 は今回の調査区からさらに北へ続き、築地 SA0203 へ続いたのでないかと推定される。

院の性格

調査に着手した当初は、この小規模な院が塔院ではないかと期待されたが、調査区を拡張し全体を明らかにした結果、東西に長いことが確認された。全国の国分寺の発掘調査の事例等から、塔院の可能性はなくなった。

では、この院の性格についてであるが、今回の調査の範囲では、築地 SA05028 から東辺の築地である築地 SA0219 まで約 18 m の空間を残していることと、築地 SA05027 下から柱列 SA05004 と SA05005 が検出されている。第 28 次調査の結果からは、築地 SA0203 に伴う北溝 SD0209 と SD0216 の途切れる地点は築地 SA0203 のほぼ中間である。これまでの調査から、この途切れる箇所は、通用口として利用するためのものであったと推定されることから、もし当初から今回の院の建設計画があったのであれば、あと 9 m 程度西の門 SB05022 と揃う場所に位置するのではないかと考えられる。これらのことから、この院は急遽何かの施設を建てる必要に迫られ、一時的に柵を作り区画した後に築地塀を作ったのではないかと推定される。

しかし、院内から明らかな建物の痕跡を確認することができないため、どのような目的で作られた院なのかは不明であるが、指導委員会等でこの院の性格については様々な御意見を受けた。その結果として、布施院、国師院、その他施設の増築の 3 つの可能性が挙げられる。その他施設の増築については、日本後紀の大同 4 (809) 年閏 2 月に、志摩国分二寺の僧尼を伊勢の国分寺に遷したという記述がみられること等が文献的な手掛かりとして挙げられる。いずれにしても、全体的には遺構・遺物の残り具合が非常に悪く、これ以上の可能性を探ることは困難なため、院の性格については、今後、全国の国分寺で行われる調査で類似例が発表されるのを待ちたいと思う。

伽藍地内の構成

伽藍地内の院の構成は、冒頭でも述べたがこれまで様々な可能性が考えられてきた。昨年度の調査で、伽藍地の東側 3 分の 1 を区画する南北の築地が北辺の築地まで接続していたことを確認したが、南辺の築地では接点を確認することができなかった。しかし、今年度の調査で、院の南端で築地 SA05026 が終わっていることが確認された。これにより、伽藍地の東側 3 分の 1 を区画す

る南北の築地塀によって構成された院は、食堂と考えられる建物がある北東院と今回の調査で確認した院からなることが明らかとなった。

一方で、建物の配置については、北東院の食堂は、南北についてはほぼ中心に位置するが東西についてはやや西寄りに位置し、今回の院と概ね中心軸がそろうことが明らかとなった。このことから、食堂は今回の院と同時期に建てられたのではないかと推定することができる。これまでの調査においても、明確に時期を特定する資料が乏しいため推定に止めておくが、伽藍地全体の建物や築地の構成を計画性と時期差の観点を加えて観察すると、まだまだ多くの仮説を立てることができる。今後の調査によって明かにされるのを期待したい。

最後に

今回の調査の当初の大きな目的であった塔については、何ら手がかりを得ることができない結果となった。今回の調査で、約 180 m 四方の伽藍地内において塔を建てることのできる空闲地が存在しなくなった。このことから、伊勢国分寺については伽藍地内には塔が存在なかったのではないかという結論に至った。

塔の存在が僧寺である根拠となる事例が多いが、この伊勢国分寺跡を塔が確認できないという理由で尼寺とするには、規模の問題や尼寺跡とされる国分遺跡において伽藍遺構が確認されておらず、国分寺跡において墨書土器等の確かな根拠もない段階で結論付けるのは尚早である。

国分寺にとって塔は最も重要な施設の一つであり、独立した塔院を持つ可能性等も全く否定できないこと等から、今後の着手予定の整備事業の中で、当初想定された伽藍地内だけでなく、伽藍地が広がる可能性や寺地の範囲等についても追加調査を行って、総合的に塔についての検証をしていきたい。

〈参考文献〉

- 「新修国分寺の研究第二巻機内と東海道」吉川弘文館
- 新田剛 2002 「伊勢国分寺跡 1」鈴鹿市教育委員会
- 藤原秀樹他 2002 「伊勢国分寺跡 2」鈴鹿市教育委員会
- 藤原秀樹他 2003 「伊勢国分寺跡 3」鈴鹿市教育委員会
- 藤原秀樹 2004 「伊勢国分寺跡 4」鈴鹿市教育委員会
- 伊藤淳 2005 「伊勢国分寺跡 5」鈴鹿市考古博物館

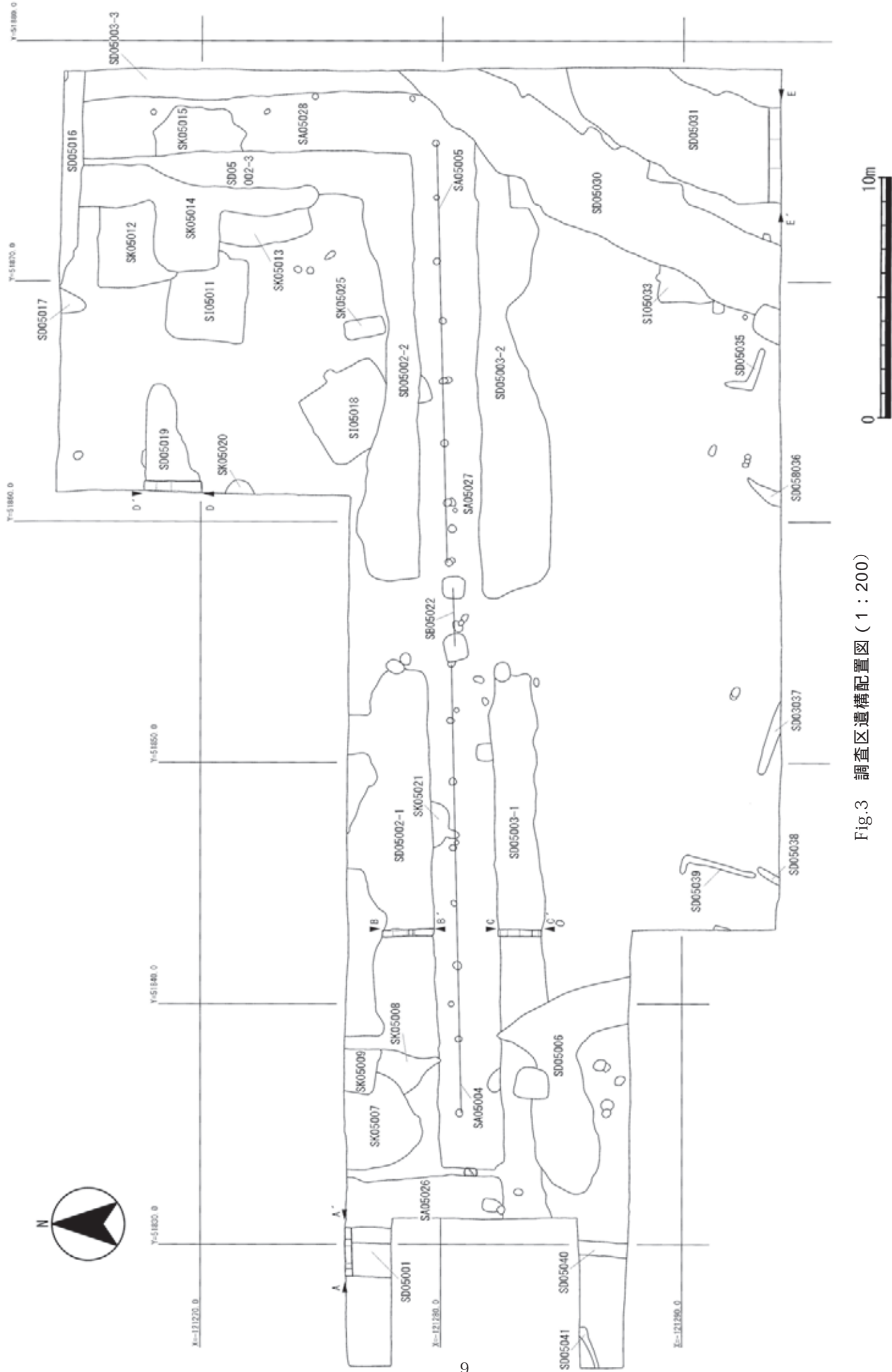
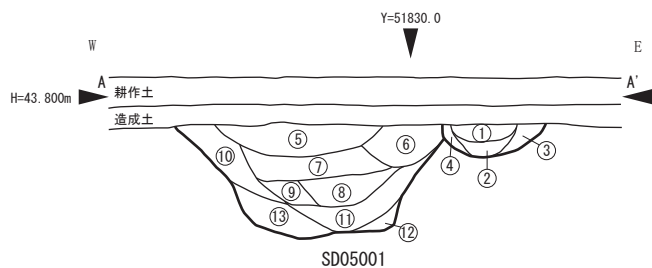


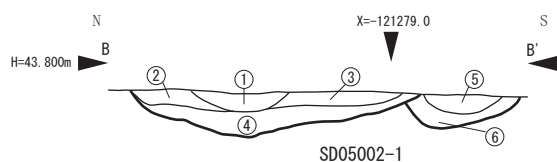
Fig.3 調査区遺構配置図 (1 : 200)

X=-121276.0ラインサブトレンチ



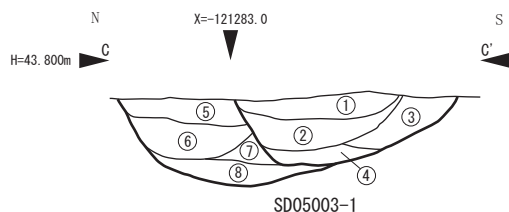
- 1 7.5YR3/4 暗褐色土 全体が瓦でしまりが無い
- 2 7.5YR4/6 褐色土 瓦片を少量含む
- 3 7.5YR4/6 褐色土
- 4 7.5YR5/6 明褐色土
- 5 7.5YR4/6 褐色土 上層に大ぶりな瓦を含む
- 6 7.5YR4/4 褐色土 やや黒がる
- 7 7.5YR4/6 褐色土 やや赤がかりややしまりが無い
- 8 7.5YR4/4 褐色土
- 9 7.5YR4/4 褐色土 7.5YR3/4暗褐色土が少量混じる
- 10 7.5YR4/6 褐色土
- 11 7.5YR4/6 褐色土 ややしまりが無い
- 12 7.5YR4/6 褐色土 7.5YR5/6明褐色土が混じる
- 13 7.5YR4/6 褐色土 7.5YR5/6明褐色土が混じる
- 地山 7.5YR5/8 明褐色土

Y=51843.0ラインサブトレンチ



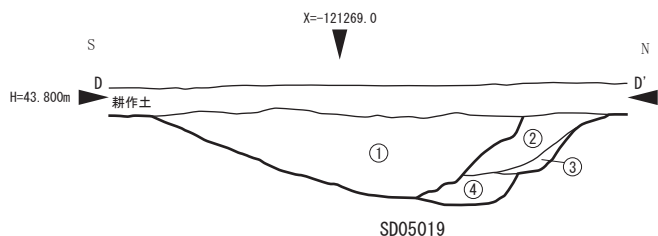
- 1 7.5YR4/4 褐色土 瓦片を多く含む
- 2 7.5YR4/4 褐色土
- 3 7.5YR4/4 褐色土
- 4 7.5YR4/4 褐色土 やや黒がる
- 5 7.5YR4/4と7.5YR4/6のまだら 褐色土
- 6 7.5YR4/6 褐色土
- 地山 7.5YR5/8 明褐色土

Y=51843.0ラインサブトレンチ



- 1 7.5YR4/4 褐色土
- 2 7.5YR4/4 褐色土 やや黒がかり瓦片を少量含む
- 3 7.5YR4/6 褐色土
- 4 7.5YR4/4 褐色土
- 5 7.5YR4/6 褐色土
- 6 7.5YR5/6 明褐色土
- 7 7.5YR4/6と7.5YR4/4のまだら 褐色土 ややしまりが無い
- 8 7.5YR4/4 褐色土 やや黒がる
- 地山 7.5YR5/8 明褐色土

Y=51861ラインサブトレンチ



- 1 7.5YR3/4 暗褐色土 全体に7.5YR4/6褐色土を少量含む
- 2 7.5YR4/6 褐色土
- 3 7.5YR4/6 褐色土 やや黒がる
- 4 7.5YR5/6 明褐色土
- 地山 7.5YR5/8 明褐色シルト

Fig.3 調査区遺構配置図 (1 : 200)



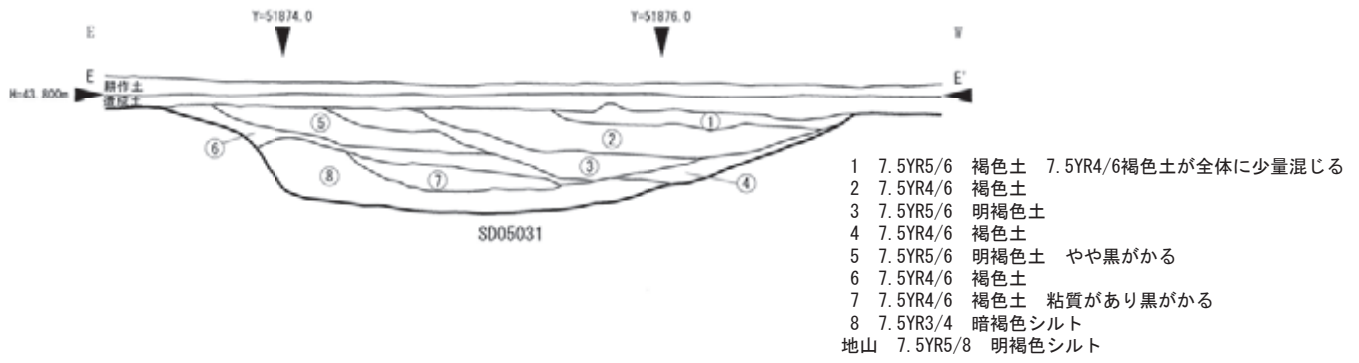


Fig. 5 サブトレ断面図 (1:40)

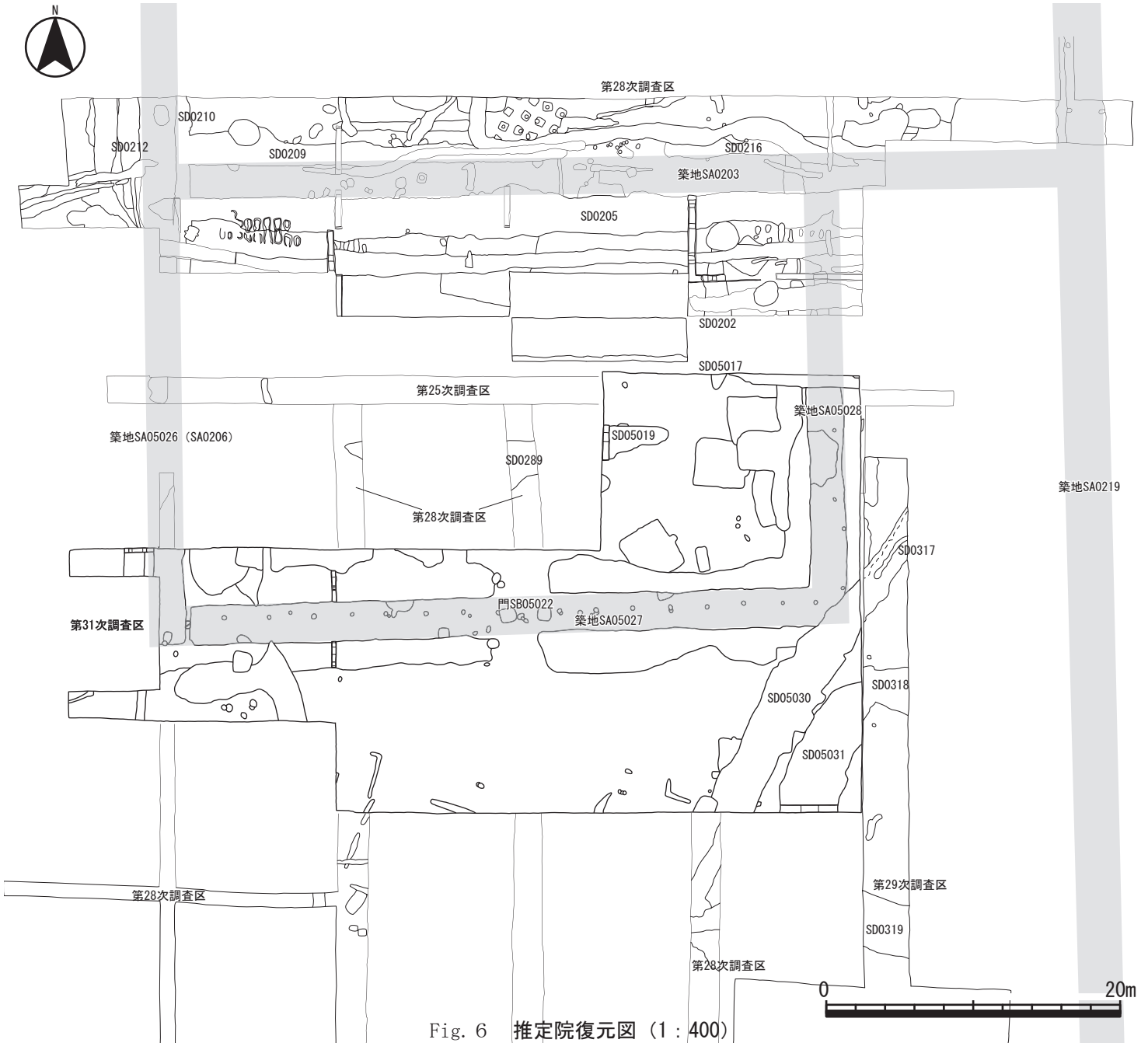


Fig. 6 推定院復元図 (1:400)

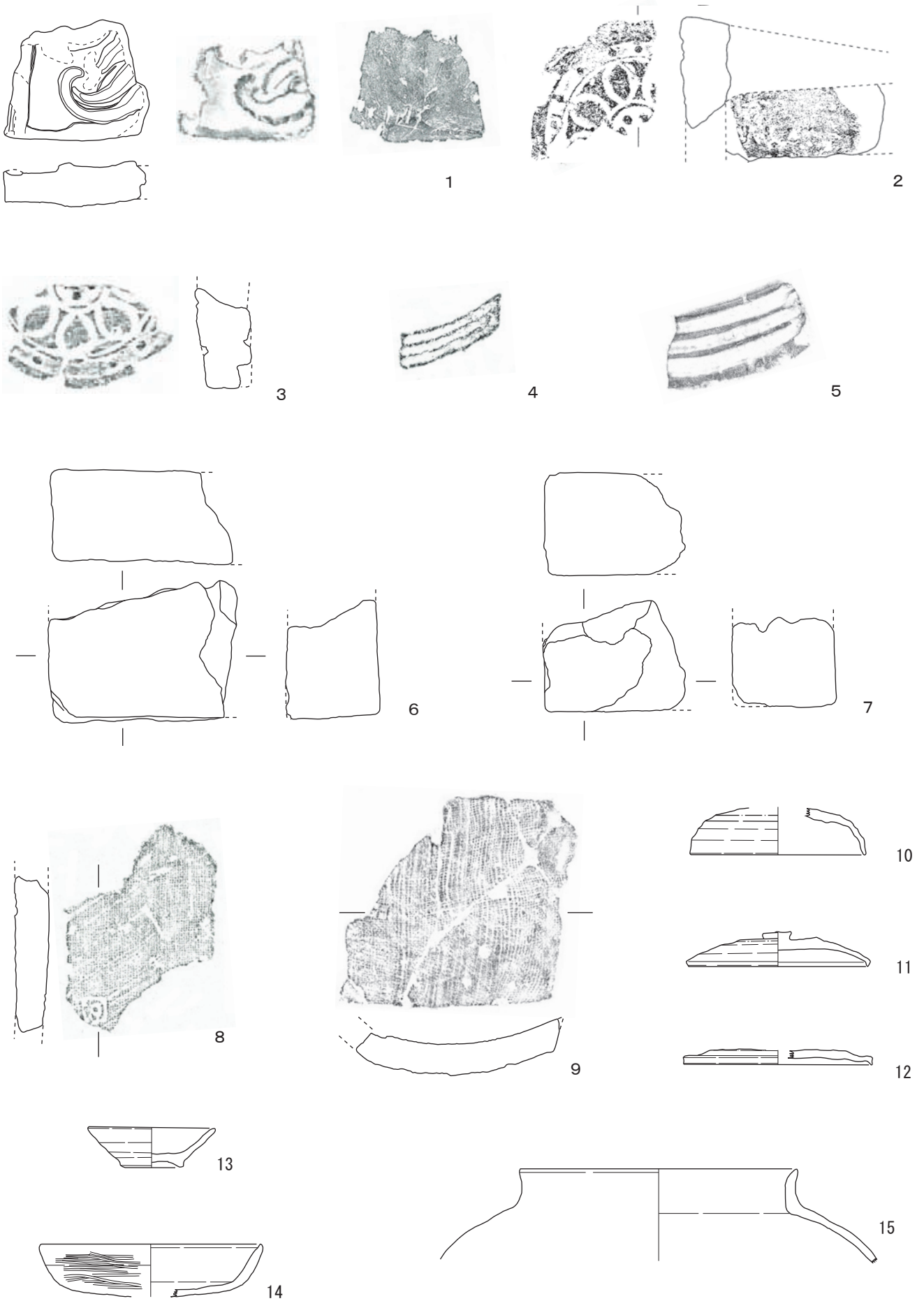
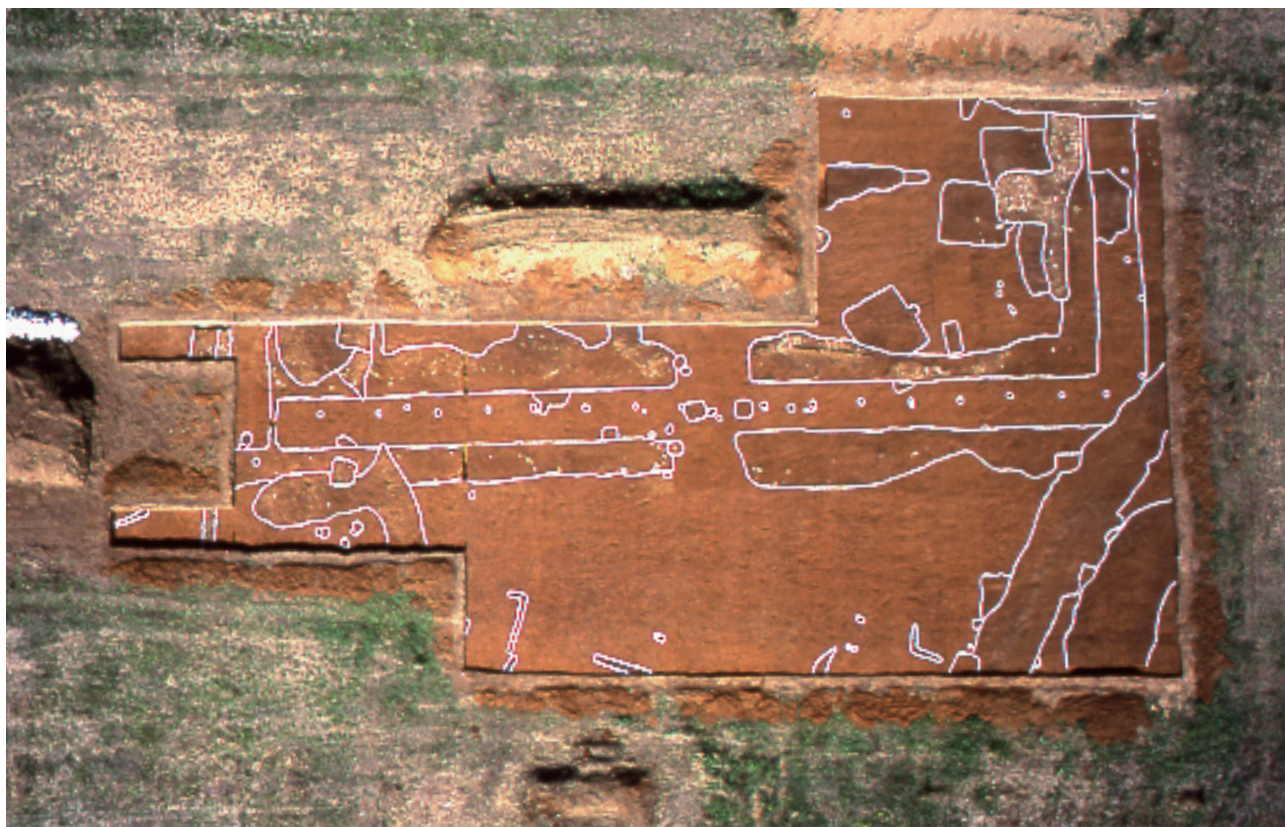


Fig. 7 出土遺物実測図 (1 : 4)





調査区全景（上から）



調査区遠景（南から）



SA05027, SA05028 検出状況 (東から)



SA05027 検出状況 (東から)



SA05026 検出状況 (北から)



SD05001 検出状況 (南西から)



SD05001 サブトレンチ (南東から)



SD05002-1 検出状況 (東から)



SD05002-1 サブトレンチ (北西から)



SD05002-2 検出状況 (西から)



SD05003-1 検出状況 (東から)



SD05003-1 サプトレンチ (北西から)



SD05003-2 検出状況 (西から)



SI05011 検出状況 (北東から)



SK05014 検出状況 (北東から)



SI05018 検出状況 (南西から)



SD05019 検出状況 (北東から)



SD05019 サプトレンチ (南東から)



SK05021 検出状況 (南西から)



SB05022 検出状況 (北から)



SD05030, SD05031 検出状況 (南西から)



SD05031 サブトレンチ (北西から)



SD05040 検出状況 (北東から)



作業風景



1



2



3



4



5



6



8



9



11



14

報 告 書 抄 録

ふりがな	いせこくぶんじあと6							
書名	伊勢国分寺跡6							
編著者名	伊藤 淳 <small>いとう あつし</small>							
編集機関	鈴鹿市 文化振興部 考古博物館							
所在地	〒513-0013 三重県鈴鹿市国分町224番地 TEL059(374)1994 <small>すずかしこくぶんじょう</small>							
発行年月日	2006年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いせこくぶんじあと 伊勢国分寺跡	みえけんすずかしこくぶんじょう 三重県鈴鹿市 こくぶんじょうあざどうあと 国分町字堂跡292外	24207	361	34° 54' 32"	136° 33' 50"	2005年 7月28日 ～ 2005年 12月9日	1,022 m ²	学術調査 史跡整備
	寺院	奈良・平安	築地・門・竪穴 住居・柱列・溝 土坑	鬼瓦・軒丸瓦・軒平瓦・平瓦 丸瓦・ \boxtimes ・押印瓦・須恵器・土師器・ 山皿	伊勢国分寺の伽藍地東側3分の1に築地塀で囲まれた東西45m×南北30mの院を確認。			

伊勢国分寺跡6

発行日 2006年3月31日

編集・発行 鈴鹿市考古博物館

〒513-0013

三重県鈴鹿市国分町224番地

TEL059-374-1994

FAX059-374-0986

E-mail: kokohakubutsukan@city.suzuka.mie.jp

URL: http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/nuseum/

印刷 有限会社中村特殊印刷工業

Ise Kokubun-ji Temple Site

Preliminary Report No.6

March,2006

Suzuka Municipal Museum of Archaeology